不許
無上菩

才市

水上勉

才市（さいち）
一九八九年五月三一日　第一刷発行
一九八九年九月　八　日　第三刷発行
著者――水上勉（みずかみつとむ）
© Tsutomu Mizukami 1989, Printed in Japan.

発行者――加藤勝久
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一二一　電話東京〇三―九四五―一一一一（大代表）
印刷所――凸版印刷株式会社　製本所――株式会社黒岩大光堂
定価――一四〇〇円（本体一三五九円）
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-204342-4　（文1）

才市（さいち）

題字

中川一政

装幀

山岸義明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

才市。浅原才市のことを書く。

この人は、嘉永三年（一八五〇）に石見国大浜村字小浜（現在の島根県邇摩郡温泉津町大字小浜）に生まれ、八十三歳で昭和七年に同地で死亡した下駄職人である。生前、下駄つくりの際にできるカンナ屑に推定約一万首の歌とも詩ともうけとれる信仰歌を書いた。それを子供の綴り方清書帳に清書しておいたのが、死後歌集にまとめられたものだけでも五千四十一首もある。辺境の下駄職人にしては、膨大な詩歌といわねばならぬが、当人は寺小屋へもゆかなかったので文盲にちかかった。それで、どの詩歌も平仮名とわずかな漢字を表音式で書いている。任意にその一つを披露してみる。

わしのこころわ　わやわやで
くもともとれの

きりともとれの
かぜともとれの
とりとめのつかのこのこころ
しよをがないさいち
太すけるをやのをじひよ
ごを（ん）うれしや、なむあみだぶつ

とれのの「の」は「ぬ」だろうか。とりとめのつかのは「つかぬ」と判じてよかろう。みなこの調子で表音字が多く、平仮名に片仮名がまじったりしている。もう一つ、

かぜをひけばせきが出る
さいちが御ほうぎの風をひいた
念仏のせきが出る〳〵

才市自身はこの詩歌を「口あい」といっていた。口あいとは、石見地方でも温泉津あたりにのこる俚謡で、口をついてでるつぶやき歌といった意だそうだ。下駄をつくりながら、つぶやくようにでる歌ことばを、わきのカンナ屑に、墨壷に竹筆でもつかって、書きとめた詩人といえる。のちに仏教学者の鈴木大拙氏が、この詩人を、真宗信者の妙好人とし、文盲ながら高い宗教的境地にあるとして、氏の名著といわれた「日本的霊性」に登場させたので才市は一躍有名になった。じつはぼくも、この本で才市を知ったのである。

妙好人とは、真宗信仰者でも、文盲にちかい庶民のなかにかくれ住んで、信仰ぶりが美しい人をいう。妙好とは、もともと蓮華の呼称で「妙法蓮華経」などに出る花のことである。まるで、白蓮華のように穢土に咲く人間だという。法然は「一文不知の尼入道」といっているが、妙好人も大半は文字をしらない。学識にもとぼしい。心に私念をもたぬ、欲も煩悩もかねそなえたままの凡夫で、口にだしこそせぬが、信心には学問も知識も邪魔だとする人々である。百姓でも、町人でも、遊女でもよい、もちろん、大工、左官でもよい。世に「妙好人伝」という本もでているが、申しあわせたようにみな無学である。凡夫なるがゆえに、愛憎の業を背負い、人を呪い、恨み、悲しみながら生きている。それでい

て、真宗信仰の教えを露ほどもうたがっていない。いちばん古い「妙好人伝」は西本願寺の石見学派の浄泉寺仰誓が書いているが、これを初篇にしてのち僧純が編んだ「妙好人伝」は百五十七人の妙好人をあげている。職業別にみると、農民六十四、商人二十八、僧尼と武士が十、そのほかに医者、旅人、乞食、遊女がいる。僧と武士をのぞくと百四十七人が底辺層の人々で、非人、乞食、遊女のまじるのも泥中蓮華の信仰界ならではのことだろう。

ぼくが、これから、浅原才市を語りたいのも、これら底辺層の妙好人と関係がないわけではないが、さきにぼくは、「一休」や「良寛」を追跡してみたことがある。ふたりの僧は、ともに教団派にいたが、申しあわせたように寺院に背をむけて、庶民の中で生きた。その事情を調べているうちに、自力宗派の禅僧も、庶民にもぐればそこに文盲の他力信仰の人々がいて、ふたりとも、庶民の喜捨なしでは生きてゆけなかった。このあたりのことを探りたくて、山間支谷の仏教信仰の地平を歩いていて、妙好人につきあたり、仏心をもつ人々がいてこそ、一休も良寛も禅境が樹立できた思いもしたものだ。この国の山間支谷は、貴種流離譚の材料に事欠かなかった。天皇の子一休の放浪にも、越後出雲崎の名主の

総領で出家したものの、僧になりそこねて乞食三昧の生活をおくった良寛和尚にも、こころよく相手になってくれる人々はいたのだった。まこと山川草木悉皆有仏性である。当然、僧には僧の回心の契機があって不思議はないが、煩悩具足の文盲男女にも、それなりの回心があったろうと思う。いま、浅原才市を追跡するのも、下駄つくる人に、どうして、他力信仰の回心がおとずれて、一万首の口あい詩歌が、生れたのだろう。そこが知りたかった。

もっとも、ぼくなりの執心の裏側には才市が下駄職人だったことがある。じつはぼくの母も下駄づくりを心得ていた。のっけに、自分の身内話で興をそぐのを承知でいえば、母は若狭の没落農家の出身だけれど、明治末期に十六歳で京都の東山二条にあった履物店へ奉公に出て下駄つくりをおぼえ、十九歳で村へ帰ると辻に筵をしいて新下駄を売ったり、鼻緒をすげかえたり、歯のへったのをさしかえたりして、ぼくらの幼時を養ってくれた。ぼくはこの母と九歳で別れて京の禅寺へ小僧に出たけれど、東山二条の店や、母の兄である堀口順吉が下京の八条坊城で下駄屋を営んでいたので、よくそこへいって、下駄づくりの日常を見た。母も、母の兄も、よく精を出す人だった。だが、才市のように詩歌をよむ

才覚はなかった。カンナ屑に日がな埋まって桐や杉の荒木どりしたのにしがみついて、黙りこくって穴をあけ、トクサでみがいてくらした。けれども、石見の口あいではないけれど、つぶやくように、ぼくにいってきかせたことの二、三はおぼえているし、その時のことなどなつかしく思いだされもする。（あとで必要なときに紹介してみるけれど）そんなことばの一つ二つも思いだされて、ぼくは、浅原才市の人となりや、下駄つくりながらの信仰生活をのぞいてみたくなったのである。世に随縁ということばがある。自力の禅僧も他力の妙好人も、縁にしたごうて生きる。凡夫のぼくにだって、才市探索に随縁の下駄つくりがあって自然だった。

ところで、才市の「伝」なるものはこの世にないといってよかった。さきに紹介した鈴木大拙氏の「日本的霊性」にしても、のち鈴木氏が編まれた「妙好人浅原才市集」にしても、才市の詩歌の宗教性について論じられる部分は多いが、評伝ではなかった。出てくる「年譜」も八十三年の生涯をわずか二頁で簡記するにとどめられているぐらいだ。また、鈴木氏のほかに、才市に関する本は、真宗教団内にも数多くあって、妙好人でも、よく語られている方だが、それらの本にも実伝は少ない。ぼくの知る限りでは、才市と同じ温泉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

津の出身で千代田学園長だった寺本慧達氏の「妙好人才市翁を語る」が、才市を知っている人であるだけにくわしかった。けれど、この本でも、才市が十一歳の時に離別した父母とのことは書かれていても、しょっちゅう北九州へ出稼ぎに出ていたのだし、それもどこにいたか。五十五歳で故郷へ帰って下駄職人になって回心するまでの経過には、詳しくふれられていなかった。その点、まだ本にはなっていないが、佐藤平氏の「浅原才市年譜」（「大谷女子大学紀要」第二十号第二輯）の考証がもっともくわしかった。佐藤平氏は、鈴木氏の「妙好人浅原才市集」の実質的編集者で、その後才市の国石見へ二十回も訪れて、新しい年譜を発表された。だが、年譜だから「伝」ではない。才市は、己れを悪才市ともよんで、あさましい人間だといいとおして一生をすごしている。父母を恨んだあまりに、父母を殺したいとまでよんだ詩をのこしているが、そんな詩も彼の人生上の体験を暗示していることはたしかだろう。けれど、年譜作者はそのような才市の謎にふれていない。残念であった。

ぼくはいま、もっとも実証性に富む「佐藤年譜」をふところに、才市の生きた土地をふりだしに歩いてゆくことにする。

2

才市の生まれた温泉津は、島根県でも、中央部といってよい。浜田と大田の中間にある海岸の小村だ。昔は邇摩郡大浜村といったが、天然の深い入江にのぞんだ港で、山陰線の駅を降りて五分もかからぬうちに町筋は海へつき当り、広い砂浜がのびている。砂浜もろとも抱えこむように小高い山脈が海へつき出て、影の濃い湾である。名高い大森銀山が栄えた江戸時代は、鉱石の積出しでにぎわい、風待ち船もしょっちゅう入ったので、海岸町は、相当にさかえたようだが、いまはむしろ、小浜地区から海づたいに西へ入りこんだ温泉地にいくらかのにぎわいがのこり、だらだら坂の両側には、湯治宿がならんでいる。湯につけたタオルが少し染まる鉄分の多い温泉は、神経障害者に卓効がある由で、十軒はこす宿も、越後屋などと他国名を冠するのが目立ったのは、江戸時代に他国者の進出で湯の町がにぎわったのだろう。ところが地元の小浜が、どちらかというと、その湯治郷に背をむけたようで、ひっそり入江を抱く町なみをみていると、才市の生まれた嘉永三年頃の面

影は想像できたのである。駅をおりて三分ぐらいのところに、龍御前神社という石段をもつ社(やしろ)があって、そのななめ向かいあたりに、しもた屋ふうでまぐち三間そこそこの二階屋の軒に「妙好人の家」と、目だたぬ掲示があった。才市の後裔梅木氏の住んでおられる家である。内へ入ると、才市が下駄をつくったころの店の面影はあって、せまい土間が奥へつきぬけ、右手戸棚に古い下駄が何足かならび、作業道具や遺品の少々が保存されていた。ぼくはここで、のちにふれるだろう才市の生活用具や、経文、肖像などを拝見したのち、才市が結婚早々に店を出した、わずか百メートルと離れていない丁字路の海へ向かう露地だとか、母親の再婚した先の小鉄屋や、そことそんなに距離もない才市の母の実家原田屋のあたりを案内され、また、他力信仰の縁となった安楽寺という、温泉津の中心とはいうものの、浅いせまい谷なので、山陰線鉄路がまたぐ谷川に接する閑雅な真宗寺で、才市の墨蹟や、碑など見せてもらい、御住職夫妻にさそわれて、才市の墓のある鉄橋下の共同墓地を訪ねた。春に一度と秋に二度、訪れてみた温泉津の町の風光は、いずれも快晴の日でもあったせいで、閑雅至極で、格別の人生苦をなめねばならなかった才市やその親たちの辿った暗い家運といってもいいようなものが、町の明るさとは、まるで裏腹に思え

て、感懐をふかめずにおれなかった。

才市は、嘉永三年の二月二十日に生まれている。父は要四郎といい、母はすぎといったが、父は、鋤、鍬など打つ鍛冶職の分家であった。要四郎は、文化九年（一八一二）の生まれだから、才市をうんだ年は、三十九歳。いまふうに考えると、おそい子持ちということになるだろう。理由があった。要四郎の父親は鍛冶屋のあった福光（温泉津から海岸を南へ切通しをぬけた福波の山辺にある）から温泉津の小浜へ転居していた。要四郎は二男で、上に病身の市太郎がいたので、六歳の時、父の死にあって、井田村の涅槃寺に小僧として入り、住職高木恵燈師のもとで得度して、剃髪後の名を西教といった。ところが、里の父が死に、さらに十二年目に兄の市太郎の病気が重くなったので、涅槃寺を退いて里へ帰って、家業を助けねばならなくなった。文政十二年、要四郎十八歳の時だ。それから八年後に兄市太郎が死んだので要四郎は家督を継ぐ。嘉永三年が才市の誕生だから、温泉津の原田屋のすぎといつ結婚したのか定かではないものの、すぎは、文政九年（一八二六）の八月生まれであるから、才市をうんだ年は、二十五歳だった。三十九歳の父と二十五歳の母。当時としては年齢のひらきもあって、めずらしい夫婦といえたかもしれない。しかも

父要四郎は、幼年時に出家して、十八歳まで寺にいた還俗男である。まるめていた頭に毛をのばして、成年になって生家をついでいるのだから、抹香くさい俗人といわねばならない。才市が十一歳の時、この夫婦は別れた。原因はさだかではない。年齢差からくる日常のぎくしゃくした関係も考えられぬではないが、要四郎に甲斐性がなくて、結婚後も井田まで通って、寺男のような生活に甘んじ、経もよめ、仏事もおぼえていたから、何かというと、涅槃寺も使いをよこして、西教さん、西教さんといって、重宝したようだ。役僧にゆけば多少の布施も頂戴できたのだろう。けれど、寒村ゆえ法事がしょっちゅうあるわけでもないから、つねは、草取りや、庭掃除などしたり、時にはご住職の檀家まわりの人力車をひいて、駄賃を得ている。そんな夫だったから、家にいるより寺にいる方が多いのでは、年若い妻に、不満が生じて当然である。世間どこをみても、夫婦はひとつ家に起居をともにする。子が生まれてもあいかわらずの涅槃寺通いの抹香くさい男に、すぎがあいそをつかして不思議はなかった。またこの夫婦は、別れる頃は浜の塩焚小屋に住んでいたという説があって、それはひどい生活だったという。才市はのちに、この両親をことのほか恨む詩歌をつくるので、あるいは、物心つく頃にたえまのなかったせまい小屋での夫婦喧

嘩の修羅をみたのではなかろうか。

原田屋は、安楽寺の門前からわずか三軒目くらいの、川ぷちに接しようとする街道下に、ひくい軒をしずめて現存していた。部屋かずもふた間か三間しかない様子を道ばたからうかがっていると、嘉永三年から明治元年頃までの、まだ、汽車も車も通らぬ泥んこの街道に面してあったろう暗い実家へ、夫が留守ばかりの孤閨を守る若い妻が、たまに帰っていた気持ちになってみたのである。才市十一歳の時は万延元年だった。

ところが、すぎは、この実家から歩いて二分とかからぬ小鉄屋の和平のところへ再婚した。すぎは三十五歳。和平の年はわからぬが、おそらく後妻の口だったのだろう。小鉄屋は構えも大きく、海に面した明るい通りに入口があった。すぎはまもなく、和平の子藤太郎を妊るから、夫の留守中に、和平と心の約束でもできていたのかもしれない。真実はわからぬながら、要四郎とすぎは円満離婚だったと古い記憶をたよりに、安楽寺の住職のご母堂や、町であった古老の口からそれがきけた。

要四郎は、すぎと別れると、安楽寺うらの墓地に掘立小屋を建てて、それを住居とし、山の草花を切って、町の家々へ売り歩いた。石見ではホイトといわれる乞食ぐらしであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com